

酪農家が求める獣医療とは何なのか？

中村聡志[†]（オホーツク農業共済組合 遠軽家畜診療所）

学生時代から、そして就職してからも常に考えていることがある。それは、『酪農家の求める獣医療とは何なのか？』という問いの答えである。そして、その問いの答えにこそ、自分の目指す獣医師像がある。もうすぐ、大学を卒業して3年半が経とうとしている。まだ、新米獣医師に毛が生えた程度であるが、酪農の生産現場で仕事をしていく中で、酪農の変化を肌で感じている。

この数十年の間に、日本の酪農産業を取り巻く環境は大きく変化してきた。現在は、穀物・飼料価格の高騰、乳製品の消費減退、そしてこれから始まるTPPなどの影響を受けて、日本の酪農家は厳しい局面に立たされている。そんな中、農場の規模拡大、6次産業化、放牧酪農、有機酪農、生産コスト削減など、酪農家は生き残りをかけて様々なチャレンジを試みている。そして、そのチャレンジは、酪農の経営形態の多様化と変化をもたらしている。

酪農の経営形態の変化にともない獣医師へのニーズも多様化していることを実感する。ある農場では、産後の起立不能の牛にカルシウム剤を点滴することを望み、ある農場では増えた跛行牛のコントロールを望み、ある農場では繁殖成績や飼料設計を改善することを望んでいる。メガファームやギガファームと呼ばれる大規模農場ではいうまでもなく、予防獣医療に重きがおかれている。一方、小中規模農場においても臨床獣医師に予防獣医療を求めるケースは増えている。なぜなら、疾病を予防することは、牛群全体を健康な状態にシフトさせることであり、農場の規模に関わらず生産性向上に寄与することを多くの畜主が理解し始めているからである。また、大規模農場では、多くの技術者（コンサルタント、普及員、繁殖管理専門の獣医師）が農場経営に関わっているのに対して、小中規模農場では、専門的な知識や技術をもった最も身近な存在が臨床獣医師であることが多い。そのため、個体診療に加えて、乳房炎や蹄病のコントロール、繁殖管理や飼料設計などの予防獣医療が臨床獣医師にも求められている。

「産後の乳熱で起立不能に陥っている牛にカルシウム剤を点滴して、農場を後にする」という時代は終わったのではないだろうか。臨床獣医師は目の前の一頭の患者

から、農場で起きている問題を構造化し、その問題に理論的にアプローチする必要がある。実際に、診療している、「獣医さん、なんでこの牛は起立不能になったんだい?」、「どうすれば、この病気を減らせるんだい?」と問われる機会は多い。現在、多くの酪農家が、農場単位、あるいは地域単位で疾病の予防的介入を必要としている。そして、個体診療が仕事の中心である臨床獣医師もそのニーズに応じていく必要がある。実際には、臨床獣医師は予防獣医療を実践しやすいポジションにある。日々の個体診療を通して、臨床獣医師は酪農家との信頼関係を構築しており、常に畜主とコミュニケーションをとることができる。また、その地域の採草地の特性、農協や蹄師との関わり方、農場の労働形態・家族構成など、疾病予防を実践するうえで重要な情報を容易に得ることができる。さらに、日々の個体診療のカルテ記録は、農場で起きている問題に対して疫学的アプローチを試みる場合に、重要な情報ソースとなる。臨床現場で仕事をする獣医師だからこそできる予防獣医療があるはずである。しかし、実際には日々の診療業務に追われて、蓄積されたデータの統計的解析や、農場への予防的介入は実践されているケースが少ないのが現状である。診療所単位、もしくは組合単位で酪農家の多様なニーズに応じていけるような“システム”を整えていく必要があるのではないかと、強く感じている。また、このようなニーズに応えられるように、獣医師はトレーニングを積む必要がある。

私は、酪農の生産現場で働く獣医師は、酪農家と同じ船に乗っているという認識をもたなければならないと思

中村 聡志

— 略 歴 —

2010年 酪農学園大学卒業
同 年 オホーツク農業共済組合
就職



[†] 連絡責任者：中村聡志（オホーツク農業共済組合 遠軽家畜診療所）

っている。そして、酪農家の視点に立って、時代の変化、酪農産業の変化、酪農家のニーズの変化を敏感に察知し、臨機応変にそのニーズに合った獣医療を提供できる獣医師こそ、私が目指す獣医師像である。目指すもの

を具現化するために、日々精進していかなくてはならない。そして、これからも考え続けていく必要がある。『酪農家の求める獣医療とは何なのか?』という問いの答えを。
